CURRENT INITIATIVES: ACADEMIC TRANSLATION IN JAPAN
和英学術翻訳プロジェクトの現在

University of Tokyo English Book Publishing Project

Gotō Kensuke

東京大学英文書刊行プロジェクト

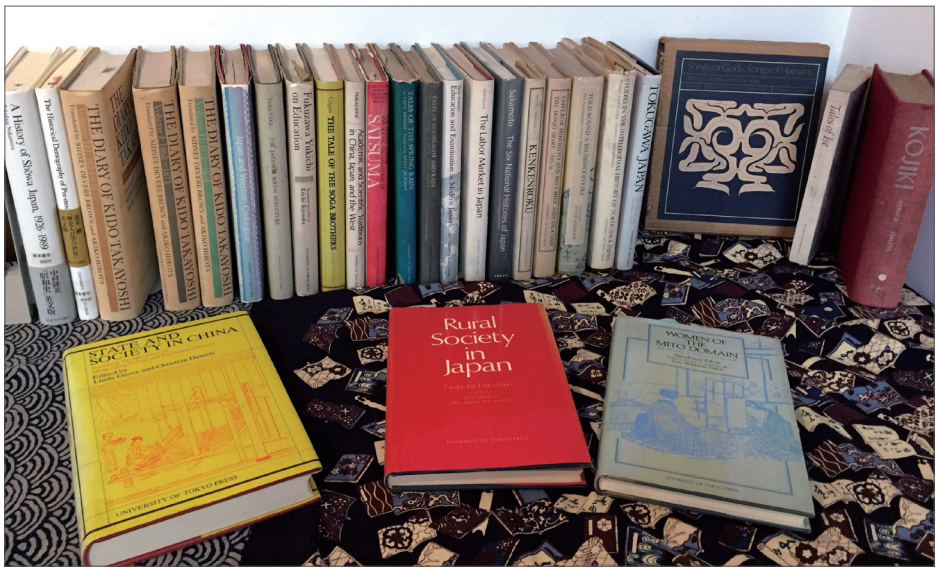
後藤健介

私に与えられた役割は、大学出版部の立場からの翻訳出版についてのご報告ということになるかと思います。大学出版部というのは、片足を大学に、もう片足は一般の出版業に置いているとおおざっぱに考えていただければよろしいかと存じます。午前中に渡辺浩先生から、大学機構側、大学の先生側から見たお話がございました。そこで私の方からは、それと関連しながらも、出版社としての大学出版部、つまり出版市場で経済的な活動をしている立場から、どのような国際出版の取り組みができるかというお話をしてみたいと思います。

東京大学出版会における国際出版の歴史

まず、東京大学出版会の国際出版の歴史を少しご紹介したいと思います。東京大学出版会は1951年に創立され、9年後の1960年には最初の英文出版を試みております。*Structure and Function of the Middle Ear*（『中耳の構造と機能』）という本が最初の刊行物でした。そこから年に1、2冊といった調子ですが、英文による出版を継続していきました。当時理事であった箕輪成男氏は「ユニヴァーシティ・プレスは国際的な発信をしなければいけない」という信念から、1969年に国際出版部というセクションを作りました。そこには専任のエディターと国際営業のスタッフも配属され、日本でも有数の国際出版チームとして活動を続けました。Susan Schmidtさんや、このシンポジウムにも参加されているNina Rajさんがおられた時のことです。その頃は、編集、制作、販売、広報など、すべての出版プロセスを自社で行っていました。そういう時代が以後1990年代まで続きました。

東京大学出版会『五十年のあゆみ』（自社版、2001）に掲載の刊行リストを見ま



すと、この国際出版部の縮小改組があった1996年までに、今でも読まれている『古事記』や『破戒』の翻訳、その他人文・社会科学、そして多くの自然科学書を含め、約640点もの英文図書を刊行しています。この間にコロンビア大学出版局との販売提携や、多くの在米大学出版部との共同出版、アメリカ大学出版部協会（AAUP、現在「大学出版部協会（AUP）」と改称）への加盟なども進め、非常に活発な活動をしていたことが窺えます。

1996年に、当時の経営部の判断で、この国際出版は改組されてしまうのですが、それと入れ替るかのようにして、今度は東京大学の中で学術の国際的発信に力を入れていかなければならないという機運が高まってきました。

それが東京大学本部・国際企画課が主管し、東京大学出版会が協力する「東京大学英文図書翻訳刊行プログラム」です。2013年に本部・国際企画課が学内で委員会を組織し、東京大学に籍を置く教授・准教授等の研究者が、日本語ですでに刊行している書籍を対象に、自薦・他薦問わず翻訳すべき書籍を公募し、査読して選定するプログラムが作られました。査読・翻訳費用は東京大学が負担し、そして選定書籍については、東京大学出版会が翻訳体制を運営し、出版会の責任のもと刊行するという条件で始まっております。

1件あたり数百万円の翻訳経費を複数年度の期間にわたって用意するという、予算が単年度に縛られがちな国立大学法人としてはかなり思い切ったプログラムで、私たちも査読のシステムや翻訳単価の策定などの協力をしましたが、国際企画課のご尽力は相当なものであったのではないかと思います。

公募に対しては数十点の応募があり、最終的にこれまで4点が選ばれています。候補作の中には自然科学系の本や一般書もありましたが、まずは英文出版の機会が

少ない人文・社会系の学術書を刊行しようということになりました。必ず東京大学出版会が刊行するという条件つきですから、選定された書籍について出版会に拒否権はないのですが、審査の過程についてはオブザーバーの形で関与し、査読用紙の書式などに記載される評価基準や、委員外に依頼するレビュワーの人選などについて、出版会の意向をかなり反映していただいたと思います。

レビュワーからいただいた査読結果はサポーティヴなものが多かった印象があります。これは対象となった書籍の内容が優れていたことの証だと思いますが、後で述べるように、翻訳された書籍を海外の大学出版部と共同で出版しようとする際に、東京大学としての評価を示す上でも役立ってくれました。一方、サポーティヴであるあまり、国外の読者に伝えるためにこんな困難がある、という厳しい指摘があまりなく、それについては、選定後、原著者、翻訳者、編集者がそれぞれ手探りで工夫することになりました。2014 年から 2017 年の 4 年間に選定された図書が以下に述べる 4 点です。翻訳者の手配と進行管理は東京大学出版会が担当しました。

University of Tokyo Press building, 1961, the headquarters from 1972 to 2013.

翻訳者の選定から刊行へ

一点目は桜井英治先生の『贈与の歴史学』（中央公論新社、2011）です。翻訳者として Ethan Segal 先生（Michigan State University）を選ばれたのは、著者ご自身です。Segal 先生は、桜井先生とも親交のある、同じ日本中世の歴史学を研究されている方です。二点目は榊原哲也先生の『フッサール現象学の生成』（東京大

学出版会、2009）です。翻訳はアウトプット側の言語のネイティブが担当するのが原則でしょうが、フッサール現象学が理解でき、かつ日本語にも堪能な英語ネイティブの翻訳者が果たしているものだろうかと危惧しておりました。実際、探してみても見つかりません。そこでこの本については原著の正確な理解を優先し、若手の現象学研究者で、榊原先生が英文ジャーナルに投稿されるときもコラボレーションをされた江口建さんという方（当時東京大学特任研究員、現帝京大学講師）に翻訳をお願いし、アメリカ現象学・実存的哲学会の会長である Thomas Nenon 先生（Memphis University）とその同僚の方に監訳をお願いするという体制で臨むことになりました。

他の二点は、原著者の先生たちには翻訳者の候補がまったくないという案件でした。そこで五百旗頭薫先生『条約改正史』（有斐閣、2010）の翻訳は、私の判断で Fred Uleman さん（Japan Research）にお願いし、もう一点の有田伸先生『韓国の教育と社会階層』（東京大学出版会、2006）には、その Uleman さんからご紹介いただいた Shinil Cho さん（La Roche College）という方に当たっていただくことになりました。Uleman さんは斯界の権威のお一人、Cho さんは日韓英に対応可能という大変な翻訳者です。Uleman さんと私を結びつけてくださったのは国際文化会館（I-House Press）です。こちらの佐治泰夫さん（現 NPO フェスティナレンテ）が私を呼んでくださった同館のシンポジウムに、Uleman さんがいらしたというご縁です。人的なネットワークがいかに大事かということですが、この点についてはこの話の最後に少し触れることになると思います。

このプログラムに応募された先生方は、ご自身では英語圏での出版経験がない方が大半で、それが応募の主な動機になっているケースが多かったと聞いています。査読意見にも「英語に訳すプロセスに本人も深く関与してもらうことで、世界に向けて自分の研究とその表現を開く経験をしてほしい」と期待されたものがありますが、これは今日のシンポジウムの他の方の報告にも出てくる通りで、ほぼ翻訳を終えた現在、どの著者の方にも「翻訳者ほど自分の文章を精読してくれた人はいない」「自分のこれまでの執筆姿勢を省みる機会になった」と仰っていただいています。

こうして翻訳の方は今順調に進んでいるところですが、それを私たちは書籍にして売らなければいけません。そのための方法として、従来すべて自社で行っていた編集・制作などの工程を再考し、今後は海外の大学出版部とのコラボレーションによって行うことを考えました。共同出版の形態やその利点については、先ほど Fister 先生がご報告された通りです。従来も東大出版会の英文書籍についてはコロンビア大学出版局が北米を中心とする販売を担当してくださっていたのですが、このたび契約内容を見直し、電子化対応も行って、コストを抑えつつ販売効率を上げることを考えました。

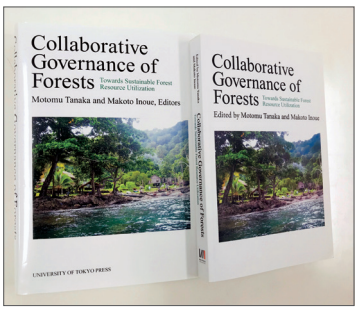
それに加え、編集・制作面、およびアジア市場への販売について、シンガポール国立大学出版局と提携することになりました。こうした共同出版への取り組みとい

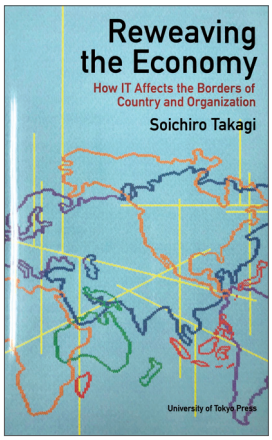
うのは、私たちに先行して、日文研さんや京都大学学術出版会さんが行っていることで、私たちはそこから学ばせていただきました。シンガポール国立大学出版局はアジアにおける英文出版のハブになりたいという意欲を強く持っていて、先ほど申し上げた東京大学の英文刊行プログラムの4点の他にも、現在進行中の、たとえば美術史学会の英文論集の刊行なども、同出版局との共同出版となっております。このスキームでは、企画と原稿の作成については東京大学出版会が責任を持ち、シンガポール国立大学出版局が編集・制作した本を、今度は私たちが仕入れ、日本国内で販売しつつ、主な部数はコロンビア大学出版局に卸して彼らが南北アメリカ・ヨーロッパで販売する（中国を含むアジアはシンガポール国立大学出版局が刊行する「シンガポール版」が販売される）という役割分担をすることになります。

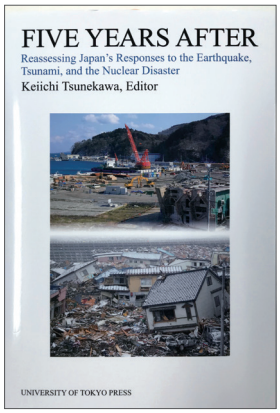
なお、今日ご紹介した東京大学の翻訳プログラムは、翻訳資金が拠出されるのであって、編集・校閲・刊行には補助金が出ません。これらの制作過程にも大変な資金を要し、市場から全額を回収するのは困難です。それについては、日本学術振興会の科学研究費・研究成果公開促進費などの助成金を申請しようと今のところ考えております。

こうした共同出版・共同販売の枠組みを実際に動かしてみたいと思い、2015年に東京大学農学部の研究チームによる *Collaborative Governance of Forests* という本を、学術振興会の助成金を得て500部刊行しました。この500部を、コロンビア大学出版局を通じて北米で200部、ちょっと小さいシンガポール版ペーパーバックを同出版部が100部、そして私たちが日本国内で200部、それぞれ販売することになっています。

このように三角形をなす英文図書共同出版のインフラが形づくられたように思います。三者で役割を分担し、リスクを分散することにより、経済的にも持続的な英文刊行の環境を作りたいということです。こうしたインフラが今後確立すれば、今後は美術や建築のバイリンガル出版なども含めていろいろな企画をしてゆきたいと思っています。







日本から英文図書を発信する意味

今日ご紹介した東京大学の翻訳刊行プログラムにおいて、私たち東京大学出版会は、東京大学にとっては、オックスフォードでうまくいかなかったための次善の策、いわば「セカンド・チョイス」であったのかもしれません。しかし一方で、東京大学として、一度休止してしまった東京大学出版会の英文刊行事業をもう一度きちんと育てたい、自校の出版部が国際発信のインフラとなるよう育てたい、というお気持ちがあることも伝わってまいりました。それにお応えする努力を続けているわけですが、しかしお気づきの通り、すでに日本のアカデミアにはSpringerなど多くの世界的な大手商業学術出版社が進出しています。あえて日本の出版社が世界に向けて英文図書を刊行する意味はどこにあるのでしょうか。

その話の前段をなすものとして、日本における他の英文出版の取り組みを少しご紹介したいと思います。主要な英文出版関係の方々がこの場にもいらっしゃるので、ご存知の方も多いかもしれませんが、一つは、「ジャパン・ライブラリー」という出版文化産業振興財団が行っているものです。これは内閣府の発意によるもので、出版の実務の多くをNTT出版さんがされていると思います。日本の文化的コンテンツを本の形でも刊行したいということで、2015年に刊行が始まり、2017年末現在で30点ほどの書籍が刊行されています。経費の調達は政府の予算により、刊行された書籍はAmazon.comなどで購入もできます（信じがたいほど安価に設定されています）。一般の書籍市場を経由してというよりは、大部分は海外の図書館等に寄贈する形で普及を図っています。

もう一つご紹介したいのは、日本学術会議が2014年に打ち出した「翻訳センター構想」です。これはネットで詳細な報告書が公開されていますので、ぜひご覧いただければと思います。日本学術会議に参加されている日本の一線級の研究者が中心になって作られました。この構想は私たちから見ても非常に望ましいもので、こうしたセンターが実現すれば、たとえば翻訳者、査読者、刊行された後に書評を書いていただく方、本の紹介文を書いていただく方などを探索する際に、トップクラスの研究者の方々は海外とのコネクションも非常に多いので、大きな力になってくれるのではと期待しています。ただこれは、今のところ人文・社会系の研究者による国際発信ニーズへの対応を表す構想のまま止まっております。理系の先生からは「最初から英語で書けばいいじゃないか」と言われているらしい、そういう話も聞きます。ですが、多様な文化圏における多様な言語で思考された人文・社会科学が、翻訳というプロセスを通して、内容面の英語一元主義を克服し、世界の知を公共化してゆくこと、そのこと自体が人類の知の推進力になるべきであり、それこそ本シンポジウムのテーマの一つではないかと思います。

日本でも多くの機関・団体がそうした翻訳の価値を認め、今日でも国際交流基金や出版文化国際交流会、出版関連の国際交流をしているイニシアチブがいくつもあります。その財源や拠点がまとまらず、バラバラに存在し活動している印象がある

のですが、政府、学術界、いろいろな公共団体などが一致して事に当たるというふうにはいかないものかと日々思っています。

こうした国内の状況の中で、日本における学術成果の英文による発信は、今や海外の出版社が主に行っているのが現状です。先ほどから Routledge 社の話が出ていますけれども、同社は著者からお金を取らないだけまだマシではないかと思います。同社も含め、これらの世界的な商業的学術出版社は、原稿の成立までの費用——日本語による著作の場合、当然、翻訳のための莫大な作業が含まれますが——についてまで、負担しよう、ないしは印税による還元をしようとは思っていません。外国語文献を自国語に翻訳することが研究者の研究業績となるのは非英語圏での話であって、日本のように経済的にはほぼ無償で学術書を翻訳しようという研究者を欧米で見出すことはふつう困難です。ですから、多くの日本の研究者が助成金、研究費、あるいはまったくの自己負担によってこの費用を捻出しています。自然科学系の出版社では、出版の初期費用をすべて著者に負担させることもあります。ある種の、つまりはアクセスされることが少ないだろう出版のコストについては、読者からではなく著者から費用を回収する場合が珍しくありません。

彼らにとって、日本の研究者はおそらくとても良い顧客です。英文書籍はいまアジアで多く売れています。アジアで知名度がある研究者が、翻訳や校閲まできちんと自費でやってきた原稿を持ってきてくれるのです。Springer はじめ、多くの世界的出版社が日本の研究者に接近しています。彼らに対し、日本の出版社がどうすれば自分の存在価値を示せるのかということをしばしば考えます。どれだけの資金の持ち出しになろうが、彼らを通せば自分の書籍を世界的に販売することができるからです。

しかし、彼らも金さえ積めば何でも出すわけではありません。編集者による原稿取得判断 (acquisition) もあり、そこを通るかどうかは紹介者の有無など「案外コネの世界だ」という感想を持つ著者もいます。海外出版社の編集者にとって、最初の Nakai 先生のお話にあった「世界的に読者がいる（と彼らが信じる）」以外のコンテンツは、無関心または忌避の対象ですらあり得ます。日本の出版社が、すでに海外で確立している評価基準（クライテリア）に沿うものを国際出版するのも重要な仕事ですが、日本には日本独自の評価軸があること自体を発信するのも、日本の出版社が行うべき仕事の一つではないでしょうか。

2015 年のフランクフルトでのブックフェアの際に、世界大学出版部協会カンファレンスという会議がありました（その後毎年フランクフルトで開催されています）。第 1 回目の議題は「レビュー」でした。ある著名なアメリカの大学出版部は、「レビュワーには一線級の研究者を選んで書いてもらっている」ともっともなことを言いますが、私が興味深かったのは、あるカナダの大学出版部の発言です。「レビュワーは、一人は世界的に評価される第一人者——それがどこの国の人でも、アメリカ人であっても構わない——を選ぶけれども、もう一人はカナダ国内の研究者から選ぶ

ようにしている」と言うのです。そうでないと私たちカナダの学術界固有のキャラクターが表現できないから、というわけです。一方、アジアで活躍しているある英文学術出版社は、「レビュワーはいらない。私たちが出したいものを出すだけ」と、割り切っていました。

ただ日本が出したいものを出すというのなら、それをただ英語にしたところでどれだけ読者を得ることができるでしょうか。海外の既存の評価基準と日本のそれをどう両立させていくか、あるいは海外の既存の基準にどう訴え、挑戦し、受容してもらえるかを考えなければなりません。

不足しているのは資金もそうですが、一番不足しているのは、もしかすると「良い編集者」かもしれません。ここで「編集者」というのは、ある本を出したいという意思を持って著者にアプローチし、しっかりした査読システムによって共同出版社や読者に対して質の保証をしながら、そのレビューや翻訳の過程を通して本の表現を磨くことで、ユニークな評価基準を説得的に発信し、そこに収斂する形でマーケティングを行い、資金を調達できる人のことです。しかし、そのような人はおそらく極めて限定されている。そこで私はこんなことを考えます。日本語で編集というとコピー・エディティングのほうを連想しますが、特に英文図書の場合、出版社にはまず、マネージング・エディターの自覚をしっかり持つ人物がいる必要がある。ただ、その時その人の労力のほとんどは、企画（原稿取得）、資金調達、関係者の協働調整に割かれることを考えると、その他の編集者の機能、たとえば読者や学界状況の取材、原稿の吟味や表現戦略の策定などについては、著者自身、研究機関、翻訳者、翻訳校閲者など、つまりここにお集まりのような方々が協働していく中で解決していくほかないのではないか、ということです。

本来日本語の本についても事情はあまり変わらないはずです。しかし、たとえば私自身が日本語の本に向かうときは、自分の中の読者感覚を信じて企画をしてもあまり間違いがないし、自分が日本語のネイティブであるためにコピー・エディティングもできるし、なにより日本国内では新刊を制作して取次に出荷すれば短期間で出版コストを回収できるので、プロジェクトごとにファンド・レイジングをする必要がほぼないのです。日本の出版社が英文で書籍を刊行し海外に発信するということは、企画、資金調達、原稿の加工、制作の工程まで、日本語の本とはまったく違う時間とお金の流れを挿入する作業に他なりません。一例をあげると、海外では企画が決定するとまずカバーデザインを作ることが多いというと、日本では驚かれることが多いです。これは出版前に読者に十分告知して注文を集約する欧米では当然のことですが、出せばとにかく換金できる日本では、事前告知のためにそこまで準備する必要はありません。

しかし、日本ではどの出版社も、なかなか専門の英文書籍編集者は雇えないでしょう。そうであれば、なんとか著者の持っている編集者的な面、校閲者の持っている編集者的な面と、うまく協働しながら解決していかなければならないと思っています。

先にご紹介した学術会議も、著者の側の視点ではありますが、こうした協働的アプローチを採用していたことを思い出してください。

そして、さらにプラスアルファがほしい。行政から——大学の場合は大学から——翻訳費のみならず、編集・出版活動自体への、何らかの補助、協働がぜひほしい。助成金というのは、どうしても本の直接経費の一部を支援するという形になっています。それも、渡辺先生がおっしゃったように、年度ごとに区切られています。そうではなくて、何とかサステイナブルな、ある程度長期間にわたり、先ほどお話ししたような協働的な出版の仕組み自体を動かす、人材を養成してゆくような援助はあり得ないのかな、と夢想しています。あるいは、こういった支援が必要だという声自体を私たちが上げなければいけないと思っています。

今日は日本における英文翻訳出版に携わるさまざまな職域の方がほとんどすべて揃っているという非常に贅沢な機会だと思います。協働を担う人と人を実際につなぐ機会は、出版に限らずあらゆる社会的協働の最初の一歩です。今後このシンポジウムを嚆矢として、日本に国際学術発信の全国的な動き、ムーブメントが起こらないか、起こってほしいなと思っています。こうした場に参加させていただきまして、日文研、オーガナイザーの方には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ぜひ今後、いろいろな面で協働させていただきたいと思っています。どうもありがとうございました。

Selected Humanities Titles Published by the University of Tokyo Press, 1962–2001 on Display at the Symposium, February 2016

Title	Author	Translator	
Tales of Ise: Lyrical Episodes from Tenth-Century Japan		Helen Craig and McCullough	1968
Kojiki		Translated with introduction and notes by Donald L. Philippi	1969
Tales of Moonlight and Rain: Japanese Gothic Tales	Uyeda Akinari	Kengi Hamada	1970
The Six National Histories of Japan	Sakamoto Tarō	John S. Brownlee	1970
Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan	Maruyama Masao	Mikiso Hane	1974
Academic and Scientific Traditions in China, Japan, and the West	Shigeru Nakayama	Jerry Dusenbury	1974
Tales of Spring Rain	Ueda Akinari	Barry Jackman	1975
The Status System and Social Organization of Satsuma: A Translation of the Shūmon Tefuda Aratame Jōmoku		Torao Haraguchi, Robert K. Sakai, Mitsugu Sakihara, Kazuko Yamada, and Masato Matsui	1975
Told Round a Brushwood Fire: The Autobiography of Arai Hakuseki		Joyce Ackroyd	1979
Songs of Gods, Songs of Humans: The Epic Tradition of the Ainu	Donald L. Philippi		1979
The Labor Market in Japan: Selected Readings	Shunsaku Nishikawa	Ross Mouer	1980
Emperor Hirohito and His Chief Aide-de-Camp: The Honjō Diary, 1933–36		Mikiso Hane	1982
Kenkenroku: A Diplomatic Record of the Sino-Japanese War, 1894–95	Mutsu Munemitsu	Edited and translated with Historical Notes by Gordon Mark Berger	1982
The Japanese Social Structure: Its Evolution in the Modern Century	Tadashi Fukutake	Ronald P. Dore	1982
The Diary of Kido Takayoshi, 3 vols.	Kido Takayoshi	Sidney Devere Brown and Akiko Hirota	1983

Title	Author	Translator	
Japan and Western Civilization: Essays on Comparative Culture	Kuwabara Takeo	Kano Tsutomu and Patricia Murray	1983
State and Society in China: Japanese Perspectives on Ming-Qing Social and Economic History		Linda Grove and Christian Daniels, eds.	1984
Fukuzawa Yukichi on Education: Selected Essays		Eiichi Kiyooka, ed., trans.	1985
The Tale of the Soga Brothers		Thomas J. Cogan	1987
Education and Examination in Modern Japan	Ikuo Amano; foreword by Ronald P. Dore	William K. Cummings and Fumiko Cummings	1990
Tokugawa Japan: The Social and Economic Antecedents of Modern Japan	Chie Nakane and Shinzaburō Ōishi	Conrad Totman	1990
Women of the Mito Domain: Recollections of Samurai Family Life	Yamakawa Kikue	Kate Wildman Nakai	1992
The Government and Politics of Japan	Hitoshi Abe et al.	James W. White	1994
A History of Showa Japan 1926–1989	Takafusa Nakamura	Edwin Whenmouth	1998
The Historical Demography of Pre-modern Japan	Akira Hayami	Kiko International	2001

Recent University of Tokyo Press English Titles [English / Bilingual]

Collaborative Governance of Forests: Towards Sustainable Forest Resource Utilization	Motomu Tanaka and Makoto Inoue, eds.	
Five Years After: Reassessing Japan's Responses to the Earthquake, Tsunami, and the Nuclear Disaster	Keiichi Tsunekawa, ed.	
Jiki-fu: A Japanese Aesthetics of Tastes	Shinichiro Ogata and the University Museum, University of Tokyo	Kei Osawa
Reweaving the Economy: How IT Affects the Borders of Country and Organization	Soichiro Takagi	